

## I : 仁志田の挨拶と経歴

### 退職の挨拶とお礼

月並みな言葉ですが、ウルトラマラソンでゴールに向かって一生懸命走っている間に“Your time is over.”と突然ポンと肩を叩かれたような、まだまだ若いと思っている間に気が付いたら自分が一番年長者になっていた、という思いです。しかし考えてみれば、医者になってから38年ほど、よくも大過なく仕事をしてきたという、少しホッとした気持ちも偽らざるところです。何はともあれ（私の口癖ですが）、本当に素晴らしい仲間と仕事をしてきた幸運に、心から感謝しています。有難うございました。少し饒舌になりますが、私がこれまで新生児・周産期医療の分野で皆さんと共に歩んできた軌跡を振り返ってみたいと思います。

#### 1. 卒業から米国留学まで（1968－9年）

私が卒業した1968年（昭和43年）は、インターン制度が無くなった年です。私は大学4年生（当時の学部2年）の時に、フツと思立って1年間休学し、一人バックパックで世界旅行をしましたので、卒業時の同級生とは2年間だけ一緒でした。それに加えポリクリで小グループに分かれたので、あまりみんなの名前も良く知りませんでした。それでもインターン闘争でストライキをするというので出来るだけ参加したのですが、ストを言い出した連中がスキーに行ったり、とあまりにもいい加減なので、もう1年留年するに値しないと袂を判って一人授業に出ました。結局それで全員無事卒業できたのですが、私はスト破りということでそのクラス会から除名だそうで卒業アルバムなるものを持っていません。幸い4年間一緒だった1年上の仲間が毎年クラス会に誘ってくれるので、心は42年卒業です。そんな経緯から、ECFMGと国家試験を受け、毎週カンファレンスのコピーが送られてきた Jersey City Medical Center にマッチしたので、一日も大学医局なるものには入らず卒後研修にアメリカに行きました。

卒業から渡米まで10ヶ月間、川崎市立病院小児科に勤務しましたが、卒業したての全く何も知らない状態で医師として働くので、ほとんど病院に毎日泊まり込み、オーベンの土屋先生からしごかれながらも、本当に楽しく多くのことを学びました。若い人に、私の人生の中で医者になったという喜びと緊張に溢れた最も充実しかつ素晴らしい日々であったと言うと、信じられない顔をする人が多いのは残念です。今思い出しても、あの日々の感動が蘇ります。

## 2. 米国研修（1969－74年）

小児科レジデント1年目は、ニューヨーク州ハドソン河沿いに立つ自由の女神の後ろにそそりたって見える Jersey City Medical Center、2年と3年目はシカゴ大学 Wyler Children's Hospital、新生児フェローの2年間は Johns Hopkins 大学 Baltimore City Hospital でした。勝手にわからず来た Jersey City Medical Center では、着いたその日から当直で、それから3ヶ月部屋を探すまで当直室に寝泊りするハードな日々でした。レジデントの8割が外国人という2流病院だったこともあり、小児科部長の Dr. Curren の目に留まって、自分でも驚くほどの高い評価をしてくれ、翌年にシカゴ大学に採用されました。シカゴではスタッフのほとんどが白人で、単に英語力だけでないレベルの差を感じ、とても3年目に残れないと思い、もしかしたら2年で日本に帰る羽目になると覚悟をしました。そこで、アメリカで研修をした証しを残すために小児科専門医の筆記試験分だけでも受けて帰ろうと、3日に1回の当直の合間に必死でネルソンを1冊読み上げました。試験の成績が幸いにも90パーセント以上で合格したことが上層部に知れ、言葉は下手でも出来る奴なのだ と評価されたことにより、3年目も残れることとなり、人生何が幸いになるかわからないことを実感しました。家内が私に声を掛けることもなかなか出来なかった、というほどハードに働いた日々でしたので、学ばせてもらったこと以上にアメリカに貢献したのだから、これで帰るのは貸しを残すような気がする思いがありました。幸い、最も有名な2大学である Harvard 大学 Beth Israel Hospital と Johns Hopkins 大学 Baltimore City Hospital の両方から新生児フェローの offer があり、条件が良かった後方で2年間働き、3年間の激務の借りを返してもらったような、楽しい日々を送らせてもらいました。帰国前に、カナダからわざわざその受験のために来た増本 義先生と、二日酔いの頭でメリーランド州の State Board(開業資格試験)を受けたところ、幸いにも二人とも合格し、米國小児学会専門医の口答試験も無事合格したところから、初期の5年間の目的はほぼ達成することが出来ました。米國小児科周産期新生児専門医の資格は、1975年が第一回の試験でしたので帰国してから受験に行つて資格を取りました。

5年間の米国研修は、その教育システムがしっかりしていることと症例を沢山経験する機会があることから、多分日本での倍以上の成果を得ることが出来たと、辛いながらもやりがいのある素晴らしい経験をしたことに満足しています。

## 3. 北里大学小児科時代（1974－84年）

1972年にシカゴからバルチモアに移る間に、休暇を取つて日本に2年後

の職探しに行きました。全くの偶然から、出来たばかりの北里大学で坂上先生に会い、彼自ら病院全体を案内してくれました。アメリカでインタビューなどの度に多くの一流どころの病院を見ていましたが、その頃の北里大学病院は、開院式の時に外国からの来賓が「北里は世界にチャレンジするか」と挨拶しているのが、あながちお世辞ではないほど世界のトップレベルの設備とシステムを備えていました。更に坂上先生は、私が北里からインタビューに行く予定にしていた慶応小児科の八代先生を呼び出し、教室員も交えて急遽私の歓迎会の宴席を設けてくれました。そのような縁で1974年から北里大学小児科にお世話になりました。卒後7年目でしたが、1年目は、家もお金もないので家内と子供2人は福島の実家をお願いして、自分はドミトリーでの一人暮らしで、新人としてネーベン当直をし、ほとんど病院住まいでした。その頃に Johns Hopkins 大学から Assistant Professor で Baltimore City Hospital の新生児のチーフの offer があった時は、まさかのような position ですので飛び上がるほど喜びましたが、家内の、もう移動はいや、の一言で断腸の思いで断りました。しかし今振り返っても、そのことを後悔しておらず、私のアメリカで戦ってきた勲章の一つと受け取っています。

北里2年目から、0歳から2歳までの乳児病棟の主任を2年間しましたが、その間重症児よりの4つの個室を一つの大部屋にして、high-care unit と名づけた集中治療室にしました。多分、日本のPICUの最初ではないかと自負しています。3年目から、三原先生とコンビで新生児専任になり、半年毎に互いにカバーしあって臨床と研究に専念するようになりました。残念ながら三原先生が退職するまでの2年間[研究は1年間]で、瞬時心拍数モニタリングと抹消循環モニタリングの生理・生化学的意味づけの動物実験をしました。臨床家の私の人生の中で、唯一の基礎研究の時間でした。一流雑誌に載るほどの成果とはなりませんでしたが、自分なりに臨床に繋がる意義ある内容であったという自負以上に、夢中で取り組んで輝いていた時でした。新生児室を一人で任されたのは、5年弱でしたが、小口・門井・斉藤・中村と4人の新生児専門の小児科講師が育ちました。

北里時代の私の自慢は、小宮先生と神奈川県に日本で最初の行政も加わった新生児医療その後周産期医療の地域化のシステムを創った事です。残念ながら25年余の間に齟齬が出来ているようですが、そのシステムの基本思想は現在の全国展開している総合及び地域周産期システムの prototype となっています。

#### 4. 東京女子医大総合母子医療センター（1984－2008年）

この期間の成果等は別項に載せてありますので、私が北里大学から東京女子

医科大学に移るエピソードと母子総合医療センター開設の頃を述べることにします。

それは1983年の周産期ME研究会[現学会]で、東京大学退官後の坂元先生の東京女子医科大学母子総合医療センター構想に私が入っていることが初めて解ったのです。当時の私は社会保険相模野病院小児科部長として出向中で、そこにあった新生児室を曲がりなりにもNICUレベル[現在は北里のNICUの重要な関連NICUになっている]にする仕事をしていました。1年ほどで北里にもどると思っておりましたが、坂上教授が坂元教授の割愛願を受け入れ、母子センターの立ち上げを手伝ってくるように言われたのは、それから間もなくでした。

1984年7月に正式に女子医に移るかまでも、非常勤で頻回に会議に参加し、既にある新生児病棟を新しいNICUに変える構想を練りました。坂元先生は、「仁志田君一番良いものを造ってくれ給え」、と言って全く注文をつけず、私の好きなようにさせてくれました。叩いて壊すことの出来る壁は全部取り払い、図面の上にクベースの大きさに切った紙を並べて、あれこれ考えました。私一人の全くの独断で作った図面がそのまま形になるので、流石に心配になって何度も工事現場に行っては眺めるのですが、完成のイメージが上手く出てきません。最終工事が終わり、テントの幕が全部取り外された時にはドキドキしながら中を歩き回り、ようやく安堵の胸をなでおろすことが出来ました。その後、何度か改装や増築をしましたが、基本的には、潜水艦の中のように分けのわからぬように区切られていた以前の新生児・未熟児室が機能的なNICUになったことに満足しています。

1984年10月1日が母子センターのオープンの日で、朝の回診は患者さんがほとんどいないので、みんなに挨拶ぐらいかな、と思いながら行ってみると、なんと超未熟児の双子が生まれてバタバタの大騒ぎでした。まさに、当母子センターの未来を象徴するような出来事で、その後私たちのセンターは超未熟児の成績が数年で世界のトップレベルとなり、超未熟児といえば女子医といわれるようになりました。初期は、前から働いていた山田多佳子先生と新井敏彦先生に北里からの能勢先生の3人の新生児専任医師に、小児科から1人と産婦人科から1人のローテーターが加わってスタートしました。ハードな勤務体制ながら、みんな楽しく良く働いてくれました。私が見かねて当直を買って行くと、なんと私が当直の時は、みんな病院に泊まってしまうことが分かりました。それは、私を心配してくれてのことかと思ったら、自分の患児の点滴が心配だからというのです。そんなこんなでしたが、畏友増本先生の配慮で長崎大学から福田先生が初期の頃3年間居てくれたことを始め、新潟大学・久留米医大・関西医大・旭川医大・島根医大などの多くの施設から研修に来てくれた先

生方に支えられて、日本でも有数のセンターに育ってゆきました。ですから、ある時の女子医大NICUで働いている医師の出身校が全員違っていただけの当たり前でした。また、女子医母子センターからも、高橋尚人（自治医大）・星順（帝京大学）・大石昌也〔女子大東医療センター〕・加部一彦〔愛育病院〕・猪野雅孝（聖母病院）など多くの人材が各施設の新生児の責任者として巣立って行きました。

女子医大の世界に誇る成績は、このような多くの素晴らしい仲間とのチームワークの成果であり、私個人の自慢ではないのですが、唯一私が女子医大でしたことによって日本全体の新生児医療に役立ったとしたら、日本の周産期医療の産婦人科側の大立者の坂元正一教授と武田佳彦教授に、新生児医療とは産婦人科の片手では出来ない確立された専門分野であることを理解してもらったことであろう。坂元先生は、天性の感で直ぐにその重要性を認識し、私がすることを全面的に支えてくれました。武田先生も、初期にはこれまで新生児を含めた周産期の専門家を自認していたプライドから紆余曲折がありましたが、最終的には時代の変化を認めていました。冗談のような話ですが、橋本武夫先生が、私が小児科の坂上先生を離れて産婦人科の坂元先生の軍門に下ったと誤解し、「仁志田を殴って説教してやる」、と思ったとのことでした。彼から直接聞いたので本当の話なのですが、もしかしたら危うく彼に殴られるところだったのかも知れません。

母子センターでの23年と6ヶ月の間、信じられないような色々な事件・事故がありましたが、素晴らしいチームワークとあたたかい心の医療で、所謂訴訟のような類のことは一つもありませんでした。幸運というよりも、それは真摯に仕事をしてきた結果であると受け取っています。また、仁志田学校なる名前で呼ばれる、母子センターで学び働いた医療者を中心とした方々の集まりがあります。その方々と一緒に仕事が出来たことが私の宝であり、心から感謝しています。

東京女子医科大学  
母子総合医療センター所長・教授  
仁志田 博司 (にしだひろし) 略歴

- 1942年： 福島県伊達郡保原町城の内に生まれる  
1968年： 慶應義塾大学医学部卒業  
1969～1974年： ジャーギー市立病院・シカゴ大学病院・ジョーンズホプ  
キンス大学病院で小児科学・新生児学を研修  
米国小児科専門医および新生児周産期専門医の資格を取得  
1974～1984年： 北里大学医学部小児科講師（新生児室主任）この間、神奈川  
生児救急医療システムの確立に参加  
1984年： 東京女子医科大学に新しい周産期医療の確立を目指した  
母子総合医療センターが設立されるにあたり、助教授・  
新生児部門長として就任  
1988年： 同センター教授に昇格  
1988年： 早稲田大学人間総合研究センター客員研究員  
1995年： 北里大学医学部客員教授  
2000年： 東京女子医科大学母子総合医療センター所長就任

米国認定書

Diplomate of The American Board of Pediatrics July 1, 1974  
(米国小児科専門医証明書 1974年7月1日)



The Board of Medical Examiners of The State Of Maryland August 15, 1974  
(米国メリーランド州開業医資格認定書 1974年8月15日)



The Sub-Board of Neonatal-Perinatal Medicine of the American Board of Pediatrics November 15, 1975

(米国小児学会新生児・周産期医学専門医認定書

1975年11月15日)

